

かたりべ126

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

暮らし

昭和30年代の暮らしの様子を再現した展示。
電気冷蔵庫や白黒テレビなどの家庭用電気製品が見られる一方で、火鉢などの火を使った生活の道具も使われていました。実際に畳へあがり、資料に触ることができます。



学び

柳下家に伝わる雑司ヶ谷村の寺子屋門人覚帳（名簿）と
往来物など（上）、学校の教材として使われていた石膏
製・木製の考古資料模型と教科書（下）

郷土資料館の展示リニューアルに伴い、企画展示室もお色直しをしました。この展示室では、現在、豊島区が計画している（仮称）芸術文化資料館の開設準備の一環として、郷土資料、美術、文学・マンガの3分野による展示会やイベントを開催し、区ゆかりの作品資料や調査研究の成果を広く皆様に紹介する機会を設けてまいります。

リニューアル記念第1弾は、郷土資料分野による企画展「学びと暮らし」を一〇月一日より開催しています。

■「学び」

このコーナーは、江戸時代から戦後初期までの豊島区のことを概観した展示になっています。はじめに、江戸時代に寺子屋（手習い塾）の師匠を務めていた柳下家を取り上げ、雑司ヶ谷村における庶民教育について古文書を通してみていきます。次に明治期以降は、小学校用の地理・歴史・社会科教科書などを展示し、考古学や文献史学の研究成果がどのように反映され、記述内容がどう変化していったのかを紹介しています。

■「暮らし」

このコーナーでは、小学3年生の郷土学習「くらしのうつりかわり」に即して、昭和三〇年代の暮らしの様子を六畳の和室で再現展示しています。家庭用電気製品が普及し始める頃の資料を、子どもも大人も一緒に、見て、触れる体験型の展示です。また、釜や炭火アイロン、氷冷蔵庫などを展示し、生活のなかで使用された道具の変遷を紹介しています。かつての暮らしの工夫や現在の道具との違いなどを探しながら、世代を超えた交流のきっかけとなりましたら幸いです。

（郷土）

郷土資料館リニューアル記念
企画展第1弾

「学びと暮らし」

平成30年1月28日まで開催中!!

常設展示室 リニューアルオープン！ 学芸員のオススメをご紹介します

1 大地の誕生

豊島区域は、武蔵野台地北東部を構成する豊島台と本郷台の上に位置しています。豊島台は、新宿区域との境を流れる神田川以北、池袋駅周辺を中心とする台地です。一方の本郷台は、板橋駅周辺から大塚駅の東側を通り、神田川へ注ぐ谷端川以東の台地です。これらは長年の火山活動や河川の浸食、土地の隆起等によって徐々に形成されてきました。

ビルや商店・住宅が林立する東京都市部の地下にも、自然地形は遺されています。つまり、私たちの生活は、こうした自然地形の上で日々営まれているのです。

このコーナーは、自然と人が刻んだ痕跡が読み取れる高さ約四メートルの地層剥ぎ取り標本（千早二丁目の谷端川流域）を中心に構成しました。天井に向かって伸びる標本の迫力と、地層に含まれるAT（始良Tnテフラ）の火山ガラスや水田の痕跡である植物珪酸体（イネ科の植物に多く含まれるガラス質細胞のこと）といったミクロの世界との対比をお楽しみ下さい。



2 原風景以前

豊島区域で現在確認できる最も古い生活の痕跡は旧石器時代。およそ一万五〇〇〇年〜三万五〇〇〇年前にあり、当時は大型の獲物を追って生活の場を移動していました。区内の遺跡からはナイフ型石器や焚火の跡などが残されています。その後、二千数百年前に米作りの技術が大陸から北部九州へ伝えられます。約一八〇〇年前の弥生時代後期になると、駒込や池袋本町の台地上に村が成立、堅穴住居群などの存在を確認できます。

本郷台・豊島台に広がる豊島区域は、平安時代には畠作を中心とする地域として歴史に現れます。そして、鎌倉と奥州を結ぶ鎌倉街道中道や、江戸と滝の城（現所沢市）を結ぶ清戸道など、この地域の村々と他地域を結ぶ道が造られていきました。

このコーナーでは、旧石器時代から武士が登場して戦乱の時代が終焉を迎えるまでを取り上げます。デザイン的にも優れた原物の石器や土器を、至近距離からご覧下さい。



3 原風景の形成と変容

現在私たちが暮らしている日常風景の原形（原風景）は、一六世紀末から一七世紀はじめ頃に形成されたと考えられます。河川の流路、主要街道の整備など、当時形づくられた自然環境、生活環境の多くが現在に引き継がれています。

江戸時代の豊島区域は、当初下高田・雑司ヶ谷・巣鴨・駒込・池袋・長崎の六ヶ村で構成されていました（のちに新田堀之内村が追加）が、これらの村々が成立するのこの時期にあたります。その後、新たな農地の開発、栽培する農産物の変化、街道沿いの町場化、武家屋敷の配置などにより、江戸時代を通してこの地域の景観が徐々に変化し、人々の生業や暮らしも多様化していきます。

このコーナーでは、区内最古の文書資料である雑司ヶ谷村の検地帳（二六三三年）、町場に居住していた人たちの名前や年齢・職業を書き上げた人別帳（一八一八年）などの和紙に墨で記された古文書、和綴じで製本された書籍、色鮮やかな錦絵などを展示しています。様々な紙資料のバリエーションをご覧下さい。



4 近代都市への道

明治維新から現在にいたる約一五〇年間に、豊島区域は、近郊農村から副都心池袋を抱える都内有数の繁華街・住宅密集地域として大きな発展をとげます。明治後期からの交通網の発達と一九二三（大正一二）年の関東大震災を機に人口が急増し、社会事業施設や学校、中小工場が次々と進出し、市街地化が加速します。特に注目されるのは、『赤い鳥』などの児童文化や新教育運動が目白・池袋を中心に展開し、昭和初年に芸術家向けの長崎アトリエ村（池袋モンパルナス）が誕生したこと。一九三二（昭和七）年には、巣鴨町、西巣鴨町、高田町、長崎町が合併して豊島区が成立しました。

このコーナーでは、都市化の諸相を、交通、産業、文化、娯楽など様々な切り口で年に数回展示替えをしながら紹介します。第二弾は「巣鴨監獄の誕生」「時代を映す記念乗車券」と題し、一九八五（明治二八）年に巣鴨村に誕生した巣鴨監獄（現在サンシャインシティ）の貴重な絵葉書と、昭和初年から二〇年代の記念乗車券一六点を展示しています。一九三九（昭和一四）年の市電池袋駅延長記念乗車券は珍しく、一見の価値あります。



5 語り継ぐ・戦争

一九三一（昭和六）年の満州事変に続き、一九三七年の日中全面戦争により本格的な戦争の時代に突入します。前線（戦場）と銃後（国内）の区別がなくなり、国民全員が戦争に動員される総力戦となりました。豊島区では、一九四四年から翌年にかけて計二一回の空襲を受け、特に一九四五年四月一三日の城北大空襲では多くの犠牲者を出し、区の約七割が焼失しました。戦地に出征した兵士、厳しい統制下で暮らす区民、集団疎開した学童、空襲の被災者たちはどのように戦争に関わり、戦後の廃墟から立ち上がったのでしょうか。このコーナーでは、「戦時下のくらし」「豊島に空襲があった日」区民が撮った空襲の記録、「池袋やミ市」「戦後の復興」をテーマに、戦中・戦後の生活資料や写真、地図、池袋東口のヤミ市模型等を通して、地域から戦争を見つめ直し、平和の大切さを考えていきます。

第一弾は、「ある出征兵士の足跡」「隣組と防空活動」「4・13城北大空襲」「配給とヤミ市の時代」と題し、計二八点の資料を展示しています。今後毎年数回、テーマを替えながら資料を紹介していきます。



6 暮らす・祈り

大きな事件や災害、行政的な変革があったとしても、私たちの生活は絶え間なく続いていきます。このコーナーでは、社会の変動のなかであって、区内に住む人びとの生活がどのような影響を受け、変化し、移ろっていったのか、生活の様相を様々なテーマと視点でご紹介いたします。

初回は豊島区の農業をテーマにしています。現在豊島区に農地は残っていませんが、展示している農具は、かつて区内で実際に使用されていた道具たちです。農具の持ち方や使用方法を図示した絵から仕事をする動作や様相を、農作業の一年を示す農事暦から自然や季節を基準とした暮らしのリズムを感じていただければ幸いです。展示を通して、今の私たちの暮らしと共通するところ、変わったところをぜひ探してみてください。



この他常設展示室では、区内の歴史を五つのジャンル別に見られる「色でたどる豊島区年表」や文化財の所在地や旧村域などがわかる「豊島区史跡マップ」を新たに展示しました。

皆様のご来館を心よりお待ちしております。（郷土）

かたりべ124号にて、二九四八(昭和二三)年に埼玉県北葛飾郡富多村大字下吉妻(現春日部市)の鈴木家本宅(以下、本宅)から移築された座敷棟を紹介しましたが、この本宅とは、いったいどのような建物だったのでしょいか。一九一六(大正五)年四月に描かれた「鈴木信太郎吉相之図」という家相図が残されており、ここから本宅の姿を読み取ることができます。

その前に改めて鈴木家について話をすると、鈴木家は古くからの吉妻の地主の家系で、約百町歩(約三〇万坪)の土地を所有していました。一八七一(明治四)年に信太郎の祖父・平兵衛は、長男の春蔵に土地の管理を任せ、自身は神田佐久間町(現千代田区)に吉妻で穫れる米を運び、米問屋を開きます。一八八五年に跡を継いだ信太郎の父・政次郎は、一九一八年の長女・きくの結婚を契機に米問屋の経営を娘婿に任せて西巢鴨町(現東池袋)に転居します。

さて、本宅に話を戻しますと、敷地は付属屋等を含めて約二〇〇坪ありました。周囲には塚がめぐっており、巳の方

角(南南東)に立つ長屋門から緩やかな勾配の石畳の通路を登ったところに本宅が建っています。本宅の北側には蔵が四棟、東側に鳥小屋、厩、蔵(納屋)二棟が建てられています。西側には築山と池を配した庭が広がるなか、庭の隅には香取様と呼ばれる小さな神社がありました。敷地北側が高くなっているのは、大雨の際に起きる利根川、江戸川の氾濫による洪水対策で、蔵には舟も用意されていたそうです。

本宅の平面構成は、土間と田の字型に配された四室が中心となり構成される「田の字型(四つ間取り)」と呼ばれる伝統的な間取りです。鈴木家の場合は、土間の東側に釜場、湯殿といった水回りが設けられています。土間の西側に一〇畳が四室あります。十畳とは廊下を介して北側に八畳と三畳、その西側に突き出すような形で八畳、六畳、三畳からなる「書院」が建てられており、この「書院」が大塚に移築された座敷棟にあたります。本宅の建設時期は正確には分っていませんが、明治二〇年頃に建てられたと考えられており、「書院」は増築ともいわれ

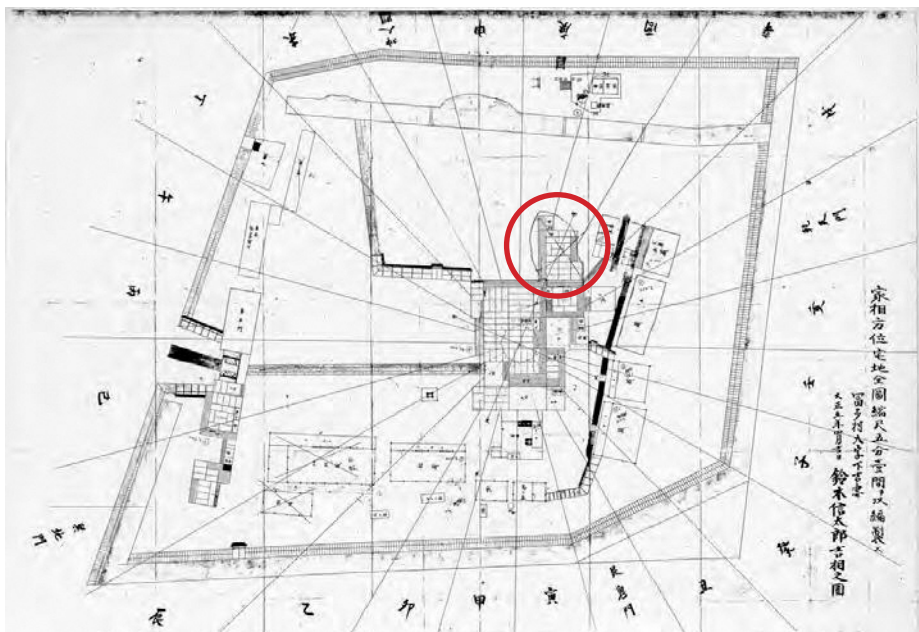
います。また、とある旗本屋敷を移築したものと、いう逸話もあるそうですが、定かではありません。信太郎が家督を継いだ後も鈴木家は不在地主として吉妻の土地を所有していました。戦後の農地改革により全ての土地を手放すことになりました。本宅も長屋門や蔵等は取り壊されましたが、「書院」は大塚、主屋は千葉県野田市に移築され現存が確認されています。

(郷土 木下)

【参考文献】『フランス文
学者の誕生』鈴木道彦著、
筑摩書房、二〇一四年

お詫びと訂正

かたりべ124号(二〇一七年七月七日発行)三ページの図三の記載に誤りがありました。写真の人物は信太郎ではなく、信太郎の弟・重次郎です。関係者ならびに読者の皆様にご注意とお詫び申し上げます。



「鈴木信太郎吉相之図」(○で囲った部分が現座敷棟にあたる)

「旧鈴木家住宅」は、豊島区東池袋五丁目
に所在する歴史的建造物で、正確には「豊島
区指定有形文化財(建造物) 旧鈴木家住宅」
という名称です。現在豊島区では、この建物
を改修・整備して(仮称)鈴木信太郎記念
館を開設する準備を進めています。

豊島区ゆかりの作家たち

豊島区では、戦前から今日まで著名な作家たちが暮らし、集い、活発な創作活動を続けています。大衆文学、詩歌、児童文学、童謡、童画、マンガなどジャンルは多岐にわたり、ゆかりのある主な作家だけでも百名以上になります。このコーナーでは、ゆかりの作家ひとりひとりをご紹介します。

探偵小説家 江戸川乱歩

(一八九四—一九六五)

〔乱歩の生い立ち〕

江戸川乱歩は、一八九四(明治二七)年一〇月二一日、三重県名張郡名張町(現・名張市)にて誕生しました。探偵小説への興味は子どもの頃から強く、中学時代の夏休みには、滞在先だった熱海の貸本屋で黒岩涙香の『幽霊塔』を借り、宿に籠もって読み耽っていたほどです。

大学在学中に、エドガー・アラン・ポーやアーサー・コナン・ドイルの探偵小説に英文で初めて接し、その面白さに耽溺するようにになると、図書館に通い探偵小説を読み漁ります。初めての探偵小説「火縄銃」を執筆したのは一九一五(大正四)年のことで、大学卒業の前年でした。大学卒業後は職を転々とする乱歩でし



平井憲太郎氏 提供

たが、一九二三(大正一二)年、雑誌『新青年』四月号に「二銭銅貨」が掲載され、デビューを果たします。これは、暗号を駆使した本格探偵小説で、翻訳・翻案ものが主流だった当時、日本人の手によるその作品は、多くの読者に衝撃を与えました。

以後、乱歩は「D坂の殺人事件」(大正一四年)、「陰獣」(昭和三年)、「押絵と旅する男」(昭和四年)など、数々の作品を発表、本格ものから怪奇幻想、通俗小説まで幅広く執筆し、探偵作家として不動の地位を築きました。

〔土曜会と探偵作家クラブ〕

乱歩は引越し魔でもあり、生涯で四六回転居を繰り返しています。そんな彼の最後の転居先が、豊島区池袋西口にあった土蔵付きの平屋建ての邸宅でした。一九三四(昭和九)年に居を移して以来三二年間、乱歩にとって最も

長く居住した家となりました。元々は人付き合いが苦手で、あまり人前に出なかつた乱歩ですが、第二次世界大戦中、小説家としての仕事がほぼなくなったため、地域活動に参加するようになります。乱歩は池袋北町会の副会長をつとめ、会合への出席や、隣組での活動などを通じて、人と関わることを厭わなくなりました。

終戦を迎えると、ほどなくして乱歩邸には編集者や探偵作家たちが足を運ぶようになります。探偵小説愛好家や作家志願者も集まるようになり、自宅に一堂が会するには手狭になってきました。

そこで乱歩の発案で、作家や愛好家らが月に一度集まって、探偵小説について語る場が設けられることになりました。第一回の会合は一九四六(昭和二一)年六月一五日に日本橋の岩谷書店(雑誌『宝石』の出版元)にて開催されました。翌月からはその会合に「土曜会」という名が付きますが、命名者は乱歩と仲の



「探偵作家クラブ会報」第一号
〔「探偵作家クラブ会報(第一号～第50号)」復刻 柏書房〕
1990年 豊島区蔵

よかつた探偵作家の大下宇陀児で、乱歩邸から池袋駅を挟んで徒歩一五分ほどのところに住んでいました。

一九四七(昭和二二)年には、「土曜会」が発展し、探偵小説家たちの親睦団体「探偵作家クラブ」が組織されます。初代会長に乱歩、副会長に宇陀児が就任し、会報の発行や文学賞の制定など、探偵小説の普及に大きく貢献しました。

乱歩自身も評論集『幻影城』で一九五二(昭和二七)年第五回日本推理作家協会賞を受賞しています。探偵作家クラブは、一九五四(昭和二九)年に関西探偵作家クラブを合併し、日本探偵作家クラブと改称、一九六三(昭和三八)年には社団法人日本推理作家協会となり、数多くの作家、評論家等が在籍する組織として、今年で結成七〇周年を迎え、ミステリーのさらなる発展のため現在も活発な活動を続けています。

(文学・マンガ 安達)



『幻影城』(岩谷書店 特製限定版)
1954年 写真は函 豊島区蔵

作品を見る読む

II 桂川寛

『週刊小河内』 かくて斗ははじまつた!



49日の本日はまだ 病室に帰るうちがわがま立五丁、ヒフの眠る夜はちかくて斗ははじまつたのだ 毎日ストに反対した村組はすでに加つた

でかち取る日が来たのだ 昨日ストに反対した仲間もデモに加つた」という文字があります。これは活字ではなく手書きでもなく、通称ガリ版と呼ばれた謄写版によるものです。版による複数制作ということになります。

小河内村（現奥多摩町）は、東京都奥多摩郡西部で行われていたダム工事の現場がある場所でした。ここでは、共産党から前衛美術会に所属する画家たちが複数送りこまれ、都市労働者と農民を結ぶためのいわゆる山村工作隊として、パンフレットの作成が行われていました。

掲載作品は一九五二（昭和二七）年七月九日号の『週刊小河内』の一図です。表紙を含め全八頁のうち、黒い太い線と紙の地で構成された四頁目は、桂川寛（一九二四—二〇一一）によるものでした。紙は焼け、周囲は劣化していますが、小高い丘から鉢巻き姿の労働者たちが大勢下り、集まってきています。人々の背景には、物見槽のようなものを見ることができません。また、この絵の下には「49日のあさは来た 飯場は薄暗いうちからわき立つた。七つの要求を俺たちの力

そうした印刷物は画家たちの手によって絵つきで作成されていきますが、山中で印刷屋に出すわけではありません。彼らはガリ版を背負って山に持ち込み、立ち退いた民家の板切れをはがし、木版を彫り、刷ったのです。このあたりの事情は、桂川の自著『廃墟の前衛』（一葉社、二〇〇四年）に詳しく書かれています。今回とりあげている『週刊小河内』は、複数の作者の手による合作になります。桂川から豊島区に寄贈された同紙には作者名の書き込みが残されており、前掲書に

図版（上）：
『週刊小河内 かくて斗ははじまつた!』4頁
桂川寛 謄写版・木版、紙
1952年7月9日 12.8×18.3cm、
豊島区蔵
参考（下）：
『週刊小河内』表紙



詳しく全画像と文字が収録されています。パンフレットとして複数制作された『週刊小河内』は、これまで技法的には謄写版とされてきました。しかしよくよく見ると、そして裏面へのインクの写りからして、上図は桂川が著作に書いているところの木版なのです。これは木版と謄写版との「二版刷り」ということになります。同じ紙に二度、刷っているのです。本紙は何部刷られたのかはわかりませんが、彼らの若いエネルギーを感じることが出来る一作といえるでしょう。

この小河内山村工作隊に関係するスケッチブックや資料を、二〇一八（平成三〇）年二月六日から三月二十五日まで郷土資料館企画展示室に展示します。「アトリエのときへ—10の小宇宙」と題し、五人の作家のアトリエ映像と九人の作家の作品で構成します。どうぞお出かけください。（美術 小林）

*技法表記の際には「謄写版」を使うことが多いです。

編集後記

『かたりべ』一二六号をお届けいたします。本号はリニューアルオープン特集号になります。

一昨年一二月より長期休館しておりました郷土資料館がいよいよ開館となりました。

リニューアルオープンにあたり、ご協力いただきました方々、開館を心待ちにしてくださった方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また休館中、ご不便をおかけいたしました。

さて、開館後、来館者の方からアンケートを通して様々なご意見を頂戴しております。「きれいになった」、「実際の道具が見られて楽しい」などといった感想が多く寄せられています。展示内容についてのご指摘をいただくこともあり、それらを参考にお声に日々助けられています。

新しくなった展示室とともに、郷土資料館がみなさまに親しまれる場となるよう、これからも努めてまいりたいと思います。（編集 上田）

かたりべ
No.126



TOSHIMA
City Museum of Arts & Culture

2017年12月8日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>